東海大学紀要海洋学部「海―自然と文化」 第８巻第１号　51-64頁（2010）
Journal of The School of Marine Science and Technology, Tokai University, Vol.8, No.1, pp. 51-64, 2010

メルヴィルの仮面劇
―― 人間愛と人間不信 ――

五十嵐　博*1

Melville's Masquerade
―― Charity and Distrust ――

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville's 9th and last novel, *The Confidence-Man* is studded with allusions to Shakespeare, and the misanthropic spirit of Timon is the key to detecting what lies behind all those eight masks of the confidence man. There often appear such words as "charity," "confidence," "trust," and "distrust" throughout the text. Charity and trust are what the con man outwardly advocates and tries to gain from the "fools" on the steamer, *Fidele*, which goes down the Mississippi, whereas distrust of man and disbelief of Christianity are the ultimate outcome of his masquerade.

１．はじめに――メルヴィルとシェイクスピア

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-1891）の９番目の，そして最後の長編『信用詐欺師――彼の仮面劇』（*The Confidence-Man: His Masquerade,* 1857）には，シェイクスピアの引喩が多発する．メルヴィルの全著作中、『信用詐欺師』はシェイクスピアへの言及が最も多い作品である．

処女作『タイピー――ポリネシアの生活を垣間見て』（*Typee: A Peep at Polynesian Life,* 1846）と第２作『オムー――南海の冒険談』（*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas,* 1847）には，シェイクスピアへの言及は一箇所もない．メルヴィルがシェイクスピアに言及するのは第３作『マーディ――そこでの航海』（*Mardi: and A Voyage Thither,* 1849）が最初で，作品の中ほどで彼は「私の海洋の上空高くに甘美なシェイクスピアが舞い上がる，春のヒバリの群れのように」[1] と書いている．続く第４作『レッドバーン――初航海』（*Redburn: His First Voyage,* 1849）では，ロンドンの賭博場の描写中で「この壮麗な館がベルモントのポーシャの月光に照らされた庭園で，やさしい恋人たち，ロレンゾとジェシカが葡萄の木々の間に潜んでいるかのように」[2] と『ヴェニスの商人』（*The Merchant of Venice*）に言及している．

第５作『ホワイト・ジャケット――軍艦内の世界』（*White-Jacket; or The World in a Man-of-War,* 1850）は，『信用詐欺師』に次いでシェイクスピアへの直接的言及が多い．言及の発生順に列挙すると，まず，リオ・デ・ジャネイロ港で一時上陸した艦長が帰艦する場面で「艦長は厳かにキャビンへと歩みを進め，『ハムレット』のボール紙の亡霊のごとくに舞台から消えた」[3] と，直喩で『ハムレット』（*Hamlet*）が言及される．次に，軍艦内図書室の蔵書に関する叙述中で，メルヴィルは「聖シェイクスピア…彼の聖なる書」[4] と記している．また，船員たちを代表して船員たちの24時間の自由行動許可を提督と艦長に願い出るジャック・チェイス（Jack Chase）が「クラレット艦長が私どもに１日の自由を賜り，永遠の至福を得られますように．と申しますのも，今後私どもが満ち溢れる祝杯を挙げるたびに艦長への思いが新たにされるでしょうから．いかがなものでしょうか？」[5] と，『ヘンリー五世』からの断片的引用（*King Henry V,* IV. iii. 55）を交えて話したり，あるいは『マクベス』から引用（*Macbeth,* I. iii. 151-3）して「御両君，お骨折りは心に書き留めて，毎日めくって読ませていただきます――マクベス」[6] と語る．

2009年11月30日受付　2010年２月25日受理
＊1　東海大学海洋学部非常勤講師（School of Marine Science and Technology, Tokai University）

さらにメルヴィルは，アメリカ海軍における鞭打ち刑の残虐さを『ヴェニスの商人』のシャイロックに喩えて，「シャイロックは１ポンドの肉を手にしなければならない」[7]と表現している．

第６作『モービィ・ディック――鯨』（*Moby-Dick; or, The Whale,* 1851）では，冒頭の「引用文集」（Extracts）で「鯨そっくりです」（Very like a whale.）という侍従長ポローニアスの台詞（*Hamlet,* III. ii. 373）[8]を『ハムレット』から引用している．第７作『ピエール――曖昧』（*Pierre; or, The Ambiguities,* 1852）の主人公ピエールには，『マーディ』の主人公タジ（Taji）と同様に，ハムレットの面影があるが，第８作『イズリアル・ポッター――異郷で50年』（*Israel Potter: His Fifty Years of Exile,* 1855）にはシェイクスピアへの言及は全くない．

そして最後の長編『信用詐欺師』にシェイクスピアの引喩が多発する．発生順に列挙すると，『夏の夜の夢』（*A Midsummer-Night's Dream*），『アテネのタイモン』（*Timon of Athens*），『シンベリーン』（*Cymbeline*），『リア王』（*King Lear*），『ヘンリー六世』（*King Henry VI*），『ハムレット』（*Hamlet*），『十二夜』（*Twelfth Night*），『冬物語』（*The Winter's Tale*），『お気に召すまま』（*As You Like It*），『トロイラスとクレシダ』（*Troilus and Cressida*）の台詞または登場人物が言及されている．特に，チャーリー（Charlie）という愛称の船客とフランク（Frank）という愛称のコスモポリタンに扮した信用詐欺師との間の対話の中でシェイクスピアが頻繁に言及されるが，『信用詐欺師』におけるシェイクスピアの数々の引喩の核となっているのは，人間を憎悪するタイモンである．

数年前に筆者がマサチューセッツ州ピッツフィールドのメルヴィルの元自宅（1850－1862年居住）を訪れた際，展示用のメルヴィルの蔵書や私物を整理途中だったキュレイターの女性は「メルヴィルが一番よく読んでいたのはシェイクスピアでした」と語った．シェイクスピアはメルヴィルにとってどのような存在だったのだろうか？メルヴィルの手紙やエッセイを読むと，彼にとってシェイクスピアは崇敬の対象であると同時に，乗り越えられるべき存在だったことが分かる．

崇敬の対象であったことは，『マーディ』脱稿後の1849年２月に大きな活字のシェイクスピア全集をボストンで入手したメルヴィルがエヴァート・A・ダイキンク（Evert A. Duyckinck）に宛てた手紙（1849年２月24日付）を読むと分かる．

「私はうすのろで間抜けだ．29年以上も生きてきて，数日前まで神聖なるウイリアムをよく知らなかった．ああ，彼は山上の垂訓に満ちていて，やさしく，そう，イエスのようだ…もし救世主がもう１人現れるとしたら，それはシェイクスピアという人格で現れるでしょう．些細なことが原因でこれまでシェイクスピアを読めなかったと思うと頭に来ます．しかし，これまで入手できた本の活字はどれも粗悪で小さくて，小スズメみたいに、か弱い私の目には耐え難いものでした．だが，偶然この素晴らしい版に出会い，私は今大喜びでページをめくっています」．[9]

乗り越えられるべき存在だったことは，彼が匿名で *Literary World* 誌に発表した批評『ホーソーンと苔』（*Hawthorne and His Mosses,* August, 1850）の中で明言されている．メルヴィルは，シェイクスピアを「真実を語る偉大な芸術」[10]の巨匠として賛美しながらも，「シェイクスピアにそれほど引けを取らぬ者たちが，今日，オハイオ川の岸辺に誕生しつつある」[11]と，そして「シェイクスピアに並ぶ者がまだ出ていないとしたら，世界に時間を与えよ．北半球か南半球か，地球のどこかで確実に彼は超えられるだろう」[12]と述べている．

また，『信用詐欺師』のテーマと結論に直結するタイモンもこの批評中で言及されており，「ハムレット，タイモン，リア，イアーゴという暗い登場人物の口を通して，彼［シェイクスピア］が巧妙に発言したり，ほのめかしたりすることは，真実そのものと感じられることであり，善良な人間が善良な性格のままでそのようなことを口にするのは狂気の沙汰であろう」[13]とメルヴィルは書いている．『信用詐欺師』中に直接引用されてはいないが，タイモンの「私は‘ミザンスロポス’で，人間なるものを憎悪する」（I am *Misanthropos,* and hate mankind.—*Timon of Athens,* IV. iii. 54）という台詞が，この作品を解明する鍵である．

２．８枚の仮面

作品の副題『彼の仮面劇』が暗示しているように，この作品はメルヴィルの仮面劇である．物語中盤で登場するコスモポリタンが言う「人生は仮装を身につけたピクニックのようなもの．一つの役を引き受け，一つのキャラクターを装い，賢く準備を整えて，愚か者を演じなければならない」[14]という台詞は，この作品の背後にある作者の人生観を語っている．しかも，この人生観はシェイクスピアのそれを反映しており，物語終盤で語り手のメルヴィルは『お気に召すまま』（*As You Like It,* II. vii. 139-142）から「世界は一つの舞台であり，男も女も皆，演技をしているだけで，それぞれに出番があり，しかも一人の人間がその生涯に多くの役を演じる」[15]という「おなじみの台詞」（familiar lines —*CM,* xli, 224）を，コスモポリタンの振る舞いに言及して引用している．

『彼の仮面劇』という副題は，仮面をかぶった主人公の登場を予告しているが，どのような仮面を何枚かぶるのかは，作品中の状況証拠から推定するしかない．例えば，詐欺師がニグロのいざり姿に扮装する場面だとか，喪章をつけた男へと変装する場面などが作品中に描かれていれば，

その描写が証拠となるが，そうした描写は一つもない．読者に提示されるのは示唆と暗示のみである．

主役の詐欺師は計８枚の仮面をかぶって現れる．登場順に列挙すると，①聾唖の男，②ニグロのいざり，[16] ③喪章をつけた帽子をかぶった男，④グレーのコートを着て白いネクタイをした男，⑤炭鉱会社社長兼株式名義書換代理人，⑥薬草医，⑦真鍮プレートを首にぶら下げた周旋業者，⑧コスモポリタン，という８つのキャラクターに扮装する．しかも，これら８変化の扮装は，４月１日，エイプリル・フールの日の明け方から深夜にかけて行われる．１番目から７番目のペルソナは全45章のこの作品の前半部である第１章から23章にかけて登場し，最後の８番目のコスモポリタンが24章以降の後半部を占めて，詐欺師の主たる仮面となっている．

以下に，詐欺師のペルソナの変移を物語の推移と併行して見てみよう．

①聾唖の男――愛（チャリティ）を訴える役

エイプリル・フールの日の夜明けに，クリーム色のスーツを着た，おしでつんぼの男が，セントルイスで，ミシシッピ川をニューオーリンズに向けて下る蒸気船フィディーリ号（*Fidele*）に乗船する．

聾唖者という設定のこの男は，人々に愛（チャリティ）を訴える役を演じる．彼は，東部から来た詐欺師を捕えた者に賞金を出す旨の張り紙の隣に立ち，手にしている石版に「コリント人への第一の手紙」13章の文言を次々に書いて，張り紙を見ている群衆に向けて掲げる．人々から脇へ押しやられたり，頭をたたかれたり，あざけられたりしながらも「愛は悪を思わず…愛は辛抱強く，情け深い…愛はすべてを耐える…愛はすべてを信じる…愛は絶えることなし」[17] の順に，５つのフレーズを次々と石板に書いて人々に見せる．愛（チャリティ）について語るこれらの文言は，近くの船内床屋入口に掲げられる「つけお断り（信用せず）」（“NO TRUST”）というサインと対照をなす．

「見知らぬ聾唖者」（the deaf and dumb stranger ―*CM*, ii, 8）は，やがて船首楼に行き，楼内のはしごの下で寝入り，その間にフィディーリ号は出航する．

②ニグロのいざり――チャリティ収集実験役

「船の前方部に…グロテスクなニグロのいざり」（In the forward part of the boat,.. a grotesque negro cripple ―*CM*, iii, 10）が現れると作者は記述するが，聾唖の男が寝入った船首楼がある「船の前方部」にニグロのいざりが登場するという設定が唯一，聾唖の男とニグロのいざりが同一人物による扮装である可能性を示唆している．

ニグロのいざりは，チャリティを集めるための実験台を演じる．ギニー（Guinea）と名乗る彼の周囲にいた船客たちは「チャリティ・ゲーム」（game of charity ―*CM*, iii, 12）としての「ペニー投げゲーム」（pitch-penny game ―*CM*, iii, 11）に興じる．両脚不自由なギニーは，タンバリンを手にし，犬のように口を開けて，投げられたペニーをキャッチする．この情景を作者は「人々は奇妙なペニー投げゲームをして競い合った．いざりの口が的であると同時に財布となり，銅貨をうまくキャッチするたびに，彼はタンバリンを打ち鳴らした」[18] と，そしてペニー銅貨の代わりにボタンを投げる船客もいたと叙述する．

この「チャリティ・ゲーム」の最中に，片脚が木の義脚の男が登場して，「彼の肢体不自由はいんちき」（his deformity being a sham ―*CM*, iii, 12）で「そいつは，おとり役として脚をねじ曲げ，体を黒く塗りたくった白人の詐欺師」（He’s some white operator, betwisted and painted up for a decoy. ―*CM*, iii, 14）だと発言する．すると，疑われたギニーは，彼の肢体不自由を証し立ててくれる人として８名を列挙する．

> 「おお，そう，そう，この船に喪章をつけたとてもいいダンナがいる．グレーのコートを着て白いネクタイをしたダンナも私のことを知っている．大きな本を抱えたダンナも．そして薬草医さん，黄色いベストのダンナ，真鍮プレートのダンナ，紫色のローブのダンナ，兵隊さんのようなダンナも」．[19]

列挙された８人の内，これ以降の物語で実際に詐欺師が扮装するのは，喪章をつけた男，グレーのコートを着て白いネクタイをした男，大きな本を抱えた男，薬草医，真鍮プレートの男であり，「黄色いベストのダンナ…紫色のローブのダンナ，兵隊さんのようなダンナ」は物語に登場しない．

人々はニグロのいざりを疑惑の目で見始めるが，善良な田舎商人だけが「私はお前を信用するよ」（I have confidence in you. ―*CM*, iii, 17）と言って半ドルの施しをし，その際，うっかり自分のビジネスカードを甲板上に落としてしまう．ニグロのいざりは「一歩脚を引きずって近寄り，片手を上に伸ばして施しを受け取ると同時に，無意識のようにして前に出した片方の，皮に包まれた脚でカードを踏んで隠した」．[20] この後，詐欺師は，このビジネスカードで得た情報を基に，この善良な田舎商人をカモにすることになる．

ニグロのいざりは，さらに，自分を信用しなくなった人々の間で「おお，この黒んぼのあのいい友だちは，あの喪章をつけたいい人はどこにいるのか？」[21] と言って，詐欺師の次の扮装を予告する．

③喪章をつけた男――信用詐欺の下準備役

黒い喪章をつけた帽子をかぶった男，自称ジョン・リングマン（John Ringman）が登場し，前章の終りでニグロのいざりに半ドルをあげた人のよい田舎商人ロバーツ（Mr. Roberts）に声をかける．喪章をつけた男は田舎商

人の昔の知り合いを装い，ひそひそ話をして高額の紙幣をせしめた後，株の儲け話があることを伝えて立ち去る．ひそひそ話は，リングマンは妻の悪妻ぶりに耐え切れず家を出たが，その妻の死を新聞で知ったため，今は帽子に喪章をつけ，娘のもとに帰るためのお金を必要としているという内容だったことが後の第12章で明らかにされる．

田舎商人の傍を立ち去った喪章男は，今度は聞こえよがしに独り言をつぶやいて，近くの大学生の気を引き，声をかけて話をした後，「ためしに私を信用してみてくれないか？」[22] と言うが，大学２年生のその青年は無言でその場から立ち去る．

喪章をつけた男は，人のよい田舎商人と若い大学生を対象とした株取引信用詐欺の下準備役を演じている．

④グレーコートと白タイの男――チャリティ収集役

ニグロのいざりは，船客たちからわずか１セントずつを投げてもらうことによって，言わば，人々のチャリティを集める実験台になったが，グレーコートを着て白いネクタイをして現れる男は，もっと多額のチャリティ募金を収集する．

彼は，セミノール・インディアンの寡婦と孤児収容所への寄付を募る．「天があなたにもっと慈愛を賜りますように」（Heaven give you more charity, sir. —*CM*, vi, 29）というグレーコート男の言葉に対して，船客の一人は「あんたには偽善をもっと少なく」（And you less hypocrisy, sir. —*ibid.*）と言い返して，寄付をせずに立ち去る．

ニグロのいざりが列挙した彼の８人の友人を探しに行っていた若い牧師が，この場を通りかかり，ニグロのいざりが言っていたグレーコートと白タイの男を目にして喜ぶ．グレーコートの男は若い牧師に対して，まことしやかに「さっきの船着場で，あのいざりがタラップの上にいるのを偶然見かけ，下船する彼に手を貸しました．話をする暇はなく，ただ手を貸しただけですが．彼は言わなかったかもしれないが，彼の兄弟があの辺りに住んでいるんです」[23] と語る．

この場面に，ニグロのいざりが「いんちき」だと言っていた，先ほどの片方が義脚の男が再び登場し，３人でニグロのいざりの真偽について会話する．ニグロのいざりが「黒人に変装した白人」（[a] white masquerading as a black —*ibid.*）ではなくて本物だと主張するグレーコートの男と若い牧師に対して，片脚男は「２人とも青い！お前さんらは金銭がこの世の苦難と詐欺や悪魔的所業の唯一の動機だと思っている．悪魔はイヴをだまして，いくら稼いだというのか？」[24] と言って立ち去る．

片脚男が消えた後，若い牧師は，かすかな疑念を抱きながらもセミノール・インディアン施設に寄付をする．グレーコートの男は，次に，近くにいた金のカフスボタンをつけた紳士に寄付を求め，新券３枚を手にする．グレーコート男は「世界のチャリティ」（the World's Charity —*CM*, vii, 39）という自分の企画を情熱的に語る．金のカフスボタン紳士はその実現性を信じないながらも，次の船着場で下船する直前にもう１枚紙幣をグレーコート男に渡す．グレーコート男は，さらに，女性用サロンに入り込み，「コリント人への第一の手紙」13章を読んでいた寡婦に20ドルを求め，セミノール・インディアンの寡婦と孤児収容所への寄付だと言って手に入れる．

⑤炭鉱会社社長兼株式名義書換代理人――信用詐欺実行役

Black Rapids Coal Company の「社長兼株式名義書換代理人」（president and transfer-agent —*CM*, ix, 47）を名乗る男が，先の大学２年生の隣に現れ，喪章をつけた男の所在を尋ねて話しかける．若い大学生は，自ら望んでこの株式名義書換代理人から石炭株を買う．次に，この代理人は台帳を抱えて，カードゲームが行われている船室に入り，田舎商人の傍らに腰掛ける．人を信用する善良な田舎商人は自分の方から株取引を望む．取引終了後，田舎商人は代理人に，船内の移民用区画にいるモグラ皮を着こんだ老守銭奴，およびニグロのいざりと喪章をつけた男の話をする．

話を聞き終えて移民用区画へと移動して来た代理人に，守銭奴がひどい咳をしながら水を求める．彼は水を持って来てやり，Omni-Balsamic Reinvigorator というよく効く薬を持っている薬草医が船内にいることを教えると同時に，お金が３倍に増える投資話を持ちかけて，守銭奴から100ドルを受け取ると，領収書も渡さずにさっと立ち去る．

この社長兼株式名義書換代理人という仮面が，信用詐欺行為における中心的役割を担っている．

⑥薬草医――「よきクリスチャン」の仮面

薬草医（herb doctor）が登場して，Omni-Balsamic Reinvigorator と Samaritan Pain Dissuader なる薬を販売する．

薬草医は，松葉杖を突いている肢体不自由者が，メキシコとの戦争で不具になった兵士を装って人々に施しを乞う姿を目にすると，「愛は絶えることなし…この不運な人の悪行は赦せる」（Charity never faileth...The vice of this unfortunate is pardonable. —*CM*, xix, 97）と言い，ニグロのいざりとよく似た事例だと言って彼に塗り薬をあげ，お金はいらないと言うが，肢体不自由者は薬草医を「よきクリスチャン」（a good Christian —*CM*, xix, 100）と呼んで，薬代金を差し出し，薬草医は結局，代金を受け取る．

薬草医は，売り上げ金額の半分をチャリティに寄付すると発言するなど，表向きは「よきクリスチャン」として振る舞うが，その実，株取引信用詐欺行為の後片付けとでも言うべき役回りを演じる．100ドルを取られた守銭奴が株式名義書換代理人を捜して姿を見せると，薬草医は彼に声をかけ，一緒に代理人を捜してあげる．薬草医は，船着場

で下船する人々の中の誰かに向かって“Mr. Truman!”と呼びかけるが間に合わず，船は船着場を離れてしまう．100ドルを持って行った男はジョン・トルーマン（Mr. John Truman）という名前でセントルイスに住んでいると薬草医は言う．極度の不安に陥っている守銭奴に対して薬草医は，Mr. Truman を信用しさえすればよいと言い，咳止めに Omni-Balsamic Reinvigorator を勧める．

薬草医と守銭奴の会話を立ち聞きしていたミズーリの独身男（a Missouri bachelor —*CM*, xxi, 106）が，その薬草は効かないと守銭奴に言う．ミズーリの独身男は薬草医を胡散臭い人物と考えており，「おれは不信に自信を持っている．特にあんたとあんたの薬草にはな」（I have confidence in distrust; more particularly as applied to you and your herbs. —*CM*, xxi, 108）と言う．

⑦真鍮プレートを首にぶら下げた周旋業者――ヒューマニストの仮面

薬草医が下船したとされる船着場を船が離れてから約20分後，ミズーリの独身男に対して犬のように追従的な男が話しかける．Philosophical Intelligence Office の頭文字 P. I. O. が刻印された真鍮プレートを首から下げた周旋業者は，薬草医と思しき「柔和なクリスチャンのような人」（a very mild Christian sort of person —*CM*, xxii, 115）が自分と入れ替わりに下船するのを見かけたと言う．

人間観が全く異なる彼ら２人の間で対話が行われる．ミズーリの独身男が「人間は皆ワルで，男の子も全員ワルだ」（all men are rascals, and all boys, too. —*CM*, xxii, 119）と言うのに対して，周旋業者は「人類は…人間につきものの不完全さを大目に見れば，全体としては，清純そのものの天使が望みうるほどまでに清純な道徳的美観を呈している」[25] と言う．

対話後，ミズーリの独身男は周旋業者から男の子を雇い入れることにし，彼に３ドル，プラス男の子の交通費を渡す．しかし，次の船着場で周旋屋が下船すると，彼に対してミズーリの独身男は疑いを抱き始め，「あいつがペテン師だとしたら，カネのためというより，好きでやっているんだろう．たかだか２，３ドルが，あれだけの手管を弄する動機なのだろうか？」[26] と考える．

⑧コスモポリタン――博愛主義の仮面

信用詐欺師のコスモポリタンの役柄での言動は，作品の半分，後半部を占めており，したがって，詐欺師がつけるペルソナの主要部を構成している．

彼はスモーキングキャップをかぶってキセルを手にし，インディアン風のベルトをした出で立ちで現れ，ミズーリの独身男に声をかける．自らを「コスモポリタン，普遍的人間」（A cosmopolitan, a catholic man —*CM*, xxiv, 132）と称する彼は博愛主義者（philanthropist）で，ミズーリの独身男は人間嫌い（misanthrope）として設定されている．コスモポリタンはミズーリの独身男の人間観を転向させようとして彼と対話するが，無理と分かると，彼を「イシュメイルのような人間」（an Ishmael —*CM*, xxiv, 138）と呼んで，立ち去る．

立ち去って行くコスモポリタンに，一人の船客が声をかけ，ミズーリの独身男と似ている「インディアン憎悪者」（Indian-hater）のジョン・モアドック大佐（Colonel John Moredock）の話をする．彼は，大佐が「インディアン憎悪者」になった経緯と「インディアンを殺すことが彼の情熱となった」（to kill Indians had become his passion. —*CM*, xxvii, 154）ことを語り，アメリカの辺境住民社会に存在するインディアン憎悪なる「情熱」について話し，「インディアン憎悪は今も存在し，インディアンが存在し続ける限り，将来も存在し続ける」（Indian-hating still exists; and, no doubt, will continue to exist, so long as Indians do. —*CM*, xxv, 142）と言う．

「私はインディアンを賞賛する」（*I* admire Indians. —*CM*, xxv, 140）と言うコスモポリタンは，インディアン憎悪の話を聞き終えると，「愛、愛を！」（Charity, charity!）と叫び，「愛が育まれるべきだ」（Charity... should be cultivated —*CM*, xxviii, 156）と言う．インディアン憎悪の話をした船客は，自分はコスモポリタンの言う「人間を信じ，人間のために立ち上がる者」（one who has confidence in him [= man], and bravely stands up for him. —*CM*, xxviii, 158）だと言って，コスモポリタンと意気投合する．

コスモポリタン――フランシス・グッドマン（Francis Goodman）――と船客――チャールズ・アーノルド・ノーブル（Charles Arnold Noble）――は，それぞれの愛称，フランク（Frank）とチャーリィ（Charlie）で呼び合い，ワインとシガーを楽しみながら会話する．『ハムレット』のポローニアス（Polonius）の台詞（*Hamlet*, I. iii. 76）の引用，「金を貸せば，金と友の両方を失う」（loan losing both itself and friend —*CM*, xxx, 174）を始め，シェイクスピアの引喩を多々織り込んだ会話をした後で，ためしにコスモポリタンが50ドルの借金を申し込んでみると，２人の間の親密な空気が一変し，チャーリィは気分が悪くなって退席する．

すると，別の船客――マーク・ウインサム（Mark Winsome）――がコスモポリタンの傍に寄って来て，あの男は有名な「ミシシッピ川の詐欺師」（a Mississippi operator —*CM*, xxxvi, 196）だから，もう会うなと警告する．２人が話しているところへ，（ポー［Edgar Allan Poe, 1809-49］がモデルと考えられる）「気違いの乞食」（a crazy beggar —*CM*, xxxvi, 194）が詩集を売りに来ると，コスモポリタンは一冊買うが，ウインサムは買わない．（エマソン［Ralph Waldo Emerson, 1803-82］がモデルと考えられる）ウインサムは，（ソロー［Henry David Thoreau, 1817-62］がモデルと考えられる）弟子のエグバート（Egbert）

を呼び，コスモポリタンに紹介して立ち去る．

ウインサムの考え方を明らかにするため，エグバートがチャーリィで親友から借金を申し込まれる側に立ち，コスモポリタンがフランクのままで借金を申し込む側に立ち，親友間の金の貸し借りの想定問答をする．コスモポリタンがどんなに頼んでみても，チャーリィ役のエグバートは，あくまで金を貸さないと返答し，ろうそく職人チャイナ・アスター（China Aster）の，友人からの借金をきっかけとする人生の転落話をする．「心」（heart）というものを訴えるコスモポリタンは，ウインサムの哲学は「非人間的」（inhuman）で「凍りついている」（frozen natures —*CM*, xli, 223）と言って，席を立ち去る．

この後，コスモポリタンは第1章に出て来た船内床屋に入ってひげ剃りを頼むと同時に，“NO TRUST”のサインに関して床屋と対話する．コスモポリタンは床屋に「つけお断りは不信を意味する」（No trust means distrust. —*CM*, xlii, 226），「あんたは人間総体を信用できないと考えるようなタイモンじゃない．あのサインを下ろせ．人間嫌いを感じさせるサインだ」（you are no Timon to hold the mass of mankind untrustworthy. Take down your notification; it is misanthropical. —*CM*, xlii, 230）と言い，サインを下ろすことによって損害が発生した場合，コスモポリタンが賠償するという条件で「タイモンのサイン」（Timon's sign —*CM*, xliii, 234）を下ろさせる．コスモポリタンは「博愛家で世界市民のフランク・グッドマン」（FRANK GOODMAN, Philanthropist, and Citizen of the World —*CM*, xliii, 235）と床屋の間の協定書を作成し，18—年４月１日午後11:45と作成時刻まで記した文書を床屋に渡す．床屋は保証金50ドルを要求するが，コスモポリタンは，それは信用契約違反だと言って断り，ひげ剃り代金も今は払わない，協定書を見よ，信用せよ，と言って立ち去る．床屋は，もう二度と彼に会うことはないと感じ，“NO TRUST”のサインを元の所に掲げ，協定書を破り捨てる．

コスモポリタンは，彼と対話中に床屋が引用したシラクの子の言葉をバイブル中に探すため，船備え付けのバイブルが置いてある紳士用キャビンに入る．ランプの下でバイブルを読んでいた老人からバイブルを譲り受けて，アポクリファ（聖書外典）中のシラクの子イエスが書いた「シラ書〔集会の書〕」（Ecclesiasticus）を読んだコスモポリタンは，その中の人間不信に満ちた文言に関して老人と対話を始める．そこへ，旅行者用の船室錠とスリ被害を未然に防止するマネーベルトを販売する少年が入って来たので，老人は一つずつ購入するが，コスモポリタンは買わない．老人は，少年からおまけでもらった「偽造紙幣発見手引」（*Counterfeit Detector*）を読んで，自分の紙幣を調べ，その間，コスモポリタンはバイブルを読み続ける．やがて２人はバイブルに関する対話を再開するが，ランプの明かりが弱まり始めたので老人はもう寝なければならないと言い，自分の個室に戻る支度をする．コスモポリタンは消えかかっているランプを完全に消し，暗闇の中を，マネーベルトを手に持ち室内便器兼救命具を抱えた老人を先導して行く．

３．愛と不信

メルヴィルは，セントルイスからニューオーリンズへ向けてミシシッピ川を下る蒸気船フィディーリ号を一種の世界の縮図として設定している．彼は物語冒頭で，船上には「多様な人間がいて，さまざまな顔と服装が交じり合い，溶け合っていた」（varieties of mortals blended their varieties of visage and garb —*CM*, ii, 9）と書き，「はるか彼方の両岸の地帯から幾筋もの流れが合流し，慌てふためきながらも，コスモポリタン的な自信に満ちた流れとなって進むミシシッピ川」[27] をこの船は下ると叙述する．しかし，やはり世界の縮図として設定されていた『ホワイト・ジャケット』の帆船軍艦ネヴァーシンク号（*Neversink*）のように，フィディーリ号の船内の様子が詳しく描出されることはない．また『オムー』の捕鯨船ジュリア号（*Julia*），『レッドバーン』の貨客船ハイランダー号（*Highlander*）や『モービィ・ディック』の捕鯨船ピークォド号（*Pequod*）の場合のように，乗員たちが詳細に描かれることもない．

『信用詐欺師』は，それ以前の８作の長編小説とは趣を異にしている．この作品にはそれ以前の作品に見られたようなドラマチックなストーリーの起伏と展開がない．場面設定は終始，蒸気船内で，４月１日の明け方から真夜中過ぎにかけて，さまざまな人物が登場し，小さな出来事が複数発生するが，大事件は起きず，登場人物間の対話が波のない川面を流れるようにして叙述される．しかも，最初の３つの章にこの作品のテーマが集約的に描かれていて，作品全体が一つのパラグラフもしくは一つのエッセイのように構成されている．[28] 最初の３章が言わばトピック・センテンスであり序論であり，そこに愛と不信というテーマが提示され，４章以降に具体的事例が描出され，最後の42，43，45章に不信の現実が結論として描かれている．

3.1　愛を掲げて

作品全体を通して「愛」（charity），「信」（confidence），「信用」（trust），「不信」（distrust）という語が頻出する．主人公の信用詐欺行為の目的は，世間の人間たちから金銭をだまし取ることにあるというより，彼らが抱えている「不信」との戦いにあり，彼らから「愛」と「信」を勝ち取ることにあるようである．ニグロのいざりに扮し，犬のような格好で口を開けて受け取るわずか１セントの金銭それ自体が詐欺師の目的ではない．片脚男が若い牧師らに対して言う「お前さんらは金銭がこの世の苦難と詐欺や悪魔的所業の唯一の動機だと思っている．悪魔はイヴをだまし

て，いくら稼いだというのか？」という台詞が，詐欺師の主目的が金銭ではないことを示唆している．さらに，作者は「あいつ［＝周旋業者］がペテン師だとしたら，カネのためというより，好きでやっているんだろう．たかだか２，３ドルが，あれだけの手管を弄する動機なのだろうか？」とミズーリの独身男に推量させているが，この推量も詐欺師の真の意図を探るための手がかりの一つになっている．

「愛」というキーワードでメルヴィルの作品群を見ると，『レッドバーン』と短編『２つの聖堂』（*The Two Temples,* 1854）が『信用詐欺師』とつながる．まず，「冷たい慈善心（チャリティ）」というフレーズで『レッドバーン』が『信用詐欺師』につなげる．『レッドバーン』では，貧しい身なりの「私」がリヴァプール郊外の田園地帯で道端の草地に寝転んでいて，棍棒を手にし犬を連れた農夫に追い立てられた際，立ち去りながら「どなたか知らんが，もしアメリカに来ることがあったら，家に訪ねて来てくれ．いつでも食事とベッドを提供するよ．きっとだぞ」[29] と言い捨て，「世間の冷たい慈善心（チャリティ）を悲しく思いながら」（full of sad thoughts concerning the cold charities of the world —*RB*, xliii, 213）リヴァプールへの帰路についたことをメルヴィルは語る．そして『信用詐欺師』で，ニグロのいざりをにせものではないかと疑い始めた人々の対応ぶりに「冷たい慈善心（チャリティ）」（cold charity —*CM*, iii, 13）という表現をメルヴィルは再び使用している．「愛」を訴え，「信」を求めつつ詐欺師が世間の人間たちをだます行為は，「世間の冷たい慈善心（チャリティ）」に対する仕返し，もしくは懲罰として意図されているように思える．

また，『信用詐欺師』の３年前に書かれた短編『２つの聖堂』にはメルヴィルのチャリティ観が述べられている．この短編は，貧しい身なりの「私」がニューヨーク市の礼拝堂の日曜朝の礼拝に入れてもらえず，こっそりと入った結果，警察に突き出されて罰金刑を受けたが，ロンドン市内の劇の殿堂では，一文無しの「私」が土曜夜の宗教劇のチケットを労働者階級の見知らぬ人からもらい，観劇中はエール売りの少年から「泡立つエール」（humming ale）をもらって「真のチャリティ」（sterling charity）に浴したという話だが，チケットをもらった時の「私」は，まず「恥ずかしく」（ashamed）思う．そして，ためらいを感じながらも「母の愛（チャリティ）が赤ん坊のお前を育て，父の愛（チャリティ）が子供のお前を養い，友の愛（チャリティ）のおかげでお前は職に就いた」[30] と思い巡らした後で，謙虚にチャリティを受け入れる．

メルヴィルは『信用詐欺師』で，好意やホスピタリティとしてではなく，施しとしてのチャリティを受けるニグロのいざりの心の内を，「施しの対象となるのはつらいことであり，さらに，そうした試練を受けながらも，明るく感謝の気持を表さなければならないと感じるのは，もっとつらいことだろう」[31] と慮る．メルヴィルが世間の人間たちに訴える「愛」とは，『信用詐欺師』冒頭で聾唖者を装った詐欺師が石版に書く「コリント人への第一の手紙」13章に書かれている「愛」であり，具体的には，彼が『２つの聖堂』で描いたような「真のチャリティ」である．

3.2　博愛と人間嫌悪

詐欺師は次々と仮面をつけ替えて登場するが，その表の顔が「愛」を語ることに変わりはない――最初に登場する，「愛」を石版に書いて掲げるおしでつんぼの男，チャリティ・ゲームの的となるニグロのいざり，インディアン遺族へのチャリティ募金を集めるグレーコートの男，「よきクリスチャン」と思しき薬草医，人間を信じる周旋業者，そして最後に登場する博愛主義者のコスモポリタン．一見，まるで愛の唱道者のように思えるが，メルヴィルには裏があると言うか，奥がある．それは，ちょうど『マーディ』で哲学者ババランジャ（Babbalanja）がキリスト的愛が実践されているセレニア島に探求の終点を見出したのに対して，タジ（Taji）はキリスト教世界そのものを否定して，そこから飛び出して探求を続けるのに似ている．

メルヴィルの表の顔は博愛主義者だが，その奥の顔は人間嫌いである．メルヴィルはコスモポリタンという仮面を通して「私はフィランスロポスで，人間を愛す…人類を信じる」（I am Philanthropos, and love mankind... I trust them. —*CM*, xliii, 231）と言っているが，この台詞は，タイモンの「私は‘ミザンスロポス’で，人間なるものを憎悪する」（I am *Misanthropos*, and hate mankind. —*Timon of Athens*, IV. iii. 54）という台詞の裏返しである．『信用詐欺師』にはタイモンの顔を持つ人物が３人――片脚男，「病気のタイタン」（invalid Titan —*CM*, xvii, 85），そしてミズーリの独身男――登場し，詐欺師と対峙する．愛の唱道者のように見える詐欺師に対して，彼ら３人は不信の提唱者である．

メルヴィルはエイハブ（Ahab）の口を通して「仮面を打ち破れ！」（strike through the mask! —*MD*, xxxvi, 164）[32] とスターバック（Starbuck）に語りかけたが，そのエイハブの再来かと思われるような人物が，ニグロのいざりの前に現れる片脚男である．片脚義脚男は，いざりは嘘で，白人の詐欺師による仮装だと，人々に向かって真実を抉り出す．メソディスト派牧師がニグロのいざりを擁護すると，片脚男は「愛と真実は別だ…見かけと事実は別だ」（Charity is one thing, and truth is another... Looks are one thing, and facts are another. —*CM*, iii, 14）と言う．「愛ですよ、愛を」（Charity, man, charity）と訴える牧師に対して，片脚男は「その愛とともにある天国へ行くべし！この地上では真の愛はもうろくし，偽りの愛がたくらみごとを謀っている」（To where it belongs with your charity! to heaven with it!…here on earth, true charity dotes, and false charity plots. —*ibid.*）と応じる．言い合いを続ける内，怒った牧師が片脚男の襟首をつかんで揺さぶり，義脚が甲板上でカタカタ鳴り，周囲の群衆が牧師の

側に立って声援すると，片脚男は「愚か者どもめが！…愚か者どもを引き連れたこの船長の下で，この愚者の船に乗る愚衆めが！」（You fools!.. you flock of fools, under this captain of fools, in this ship of fools! —*CM*, iii, 15）と叫ぶ．

立ち去って行く片脚男に対して牧師が「彼は片脚立ちで体を引きずって行くが，その姿は一面的な人間観の象徴だ」（There he shambles off on his one lone leg, emblematic of his one-sided view of humanity. —*ibid.*）と言うと，片脚男は「塗りたくられたデコイを信じればいい…そうすれば俺は復讐することになる」（trust your painted decoy,.. and I have my revenge. —*ibid.*）と言い返す．

作者は牧師に片脚男を「不信仰の邪悪な心」（his evil heart of unbelief —*CM*, iii, 16）を持つ「神に見放された者」（godless reprobate —*CM*, iii, 15）と呼ばせているが，この形容の仕方は『レッドバーン』のジャクソン（Jackson）と『モービィ・ディック』のエイハブにも，そっくりそのまま当てはまるものである．ジャクソンもエイハブもメルヴィルの精神の一部であったように，この「不信の精神」（the spirit of distrust —*CM*, vi, 33）の具現者たる片脚男もメルヴィルの一部であり，奥の顔である．真実を抉る片脚男は，「チャリティ・ゲーム」の対象となるニグロのいざりとチャリティ募金を収集するグレーコートの男の前にだけ姿を見せる．グレーコートの男の前では「悪魔はイヴをだまして、いくら稼いだというのか？」と言い，詐欺師を悪魔に，楽園の蛇に喩えている．

片脚男に続いて詐欺師の仮面を打ち抜く登場人物は「病気のタイタン」のような風貌の大男で，彼は，人々に向かって薬草の効能証明書を読み上げる薬草医を横から殴りつけて，「ヴァイオリンでも弾くようにして人の心の琴線を弄ぶ不敬な輩め！蛇め！」（Profane fiddler on heart-strings! Snake! —*CM*, xvii, 88）と叫ぶ．「病気のタイタン」の登場は薬草医の前のみだが，ここで重要なのは，薬草医に扮した詐欺師がはっきりと蛇に喩えられていることである．当然，この蛇は人間を悪に開眼させた楽園の蛇であり，ジャクソンも蛇に喩えられていた．つまり，ここでメルヴィルは「よきクリスチャン」の仮面をかぶった薬草医としての詐欺師の裏の顔はジャクソンのような人間憎悪者であることを告白しているのである．

仮面を打ち破る3人目のタイモンであるミズーリの独身男を，語り手ははっきりと「人間嫌い」と呼んでいる．彼は「おれは不信に自信を持っている．特にあんたとあんたの薬草にはな」と「よきクリスチャン」の仮面をかぶる薬草医に向かって言い，ヒューマニストの仮面をつけた周旋業者には「人間は皆ワルで，男の子も全員ワルだ」と言い，博愛主義者の仮面をつけたコスモポリタンには「手を触れるな！…さわるな」（Hands off!.. Off hands —*CM*, xxiv, 131-2）と言う．コスモポリタンはミズーリの独身男を「イシュメイルのような人間」と呼ぶが，この比喩はメルヴィルと彼の作品群を統合的に理解するための鍵である．そう，メルヴィルは，初航海の船内でイシュメイルのように疎外された「私」レッドバーンであると同時に人間を憎悪するジャクソンであり，白鯨を追う「私」イシュメイルであり，かつエイハブであり，愛を掲げる詐欺師である一方で，その仮面を打ち破る人間嫌悪者，人間不信者でもある．

メルヴィルの作品中には，したがって彼自身の精神の内もそうだったであろうと推察されるが，人間への愛と不信，博愛と人間嫌悪という相反する2つの姿勢が並存している．これら2つの精神姿勢は，建前と本音，表の顔と裏の顔と言うより，前者は前面に押し出された顔で，後者は奥に潜む顔と見るべきであろう．そして両方ともメルヴィルの偽りなき顔である．

人間愛，博愛の姿勢をメルヴィルはコスモポリタンの口を通して次のように語る．「人はこの壮大な地球をむだに放浪はしない．それは友愛と融和の感覚を培う…真の世界市民の原則は…悪に対して善を報いることです」[33]と．これは，船乗りとして世界を放浪した経験をもつメルヴィルの偽りのない思いであろう．同様の理想主義的心情をメルヴィルは『マーディ』での「私」を通して「だれもかれも皆，本質的には兄弟である」（one and all, brothers in essence —*Mardi*, iii, 12）とか，あるいはババランジャの口を通して「全マーディを自分の家と考えよ．国家は名称にすぎない．そして大陸は移ろいゆく砂でしかない」[34]と語っている．

また，インディアンに関してコスモポリタンが発する言葉も，メルヴィルの真情を伝えている．コスモポリタンは「私はインディアンを賞賛する」と言うが，『モービィ・ディック』でのタシュテゴ（Tashtego）の描き方を見れば，これは作者自身の言葉であると容易に判断できる．そして，インディアン憎悪の話を聞き終えたコスモポリタンが発する「愛を，愛を！…愛が育まれるべきだ」という文言も作者自身の偽らざる気持を表していることは，彼が匿名で発表した書評『パークマン氏の旅』（*Mr Parkman's Tour*, 1849）を読めば分かる．この書評の中でメルヴィルは，野蛮人は文明人の祖先であることを説明し，野蛮人として蔑まれるインディアンに対して「侮蔑ではなくて憐れみを」（Let us not disdain.., but pity.）[35]と読者に訴えかけている．

メルヴィルは，さらに，博愛という前面の顔を持つコスモポリタンの口を通して，彼の奥に潜む顔である「人間嫌悪と不信心」（misanthropy and infidelity —*CM*, xxviii, 157）について，こう語っている．

> 「人間嫌悪は宗教不信と根は同じで，対を成している．それは同じ根から出ている．なぜって，無神論者とは，この宇宙に愛という支配原理を見出さない者であり，人間嫌いとは，人間の中にやさしさという支配原理を見出

さない者に他ならないからだ」.[36]

つまり，メルヴィルはここで，彼自身の奥に潜む人間嫌悪の顔はジャクソンやエイハブのような無神論者の顔でもあることを間接的に明かしているのである．

3.3 不信の闇の中へ

人間不信と「宗教不信」がこの作品の結論であり，これら2つの不信は最終章で象徴的に描出される．

作者は最終章に「コスモポリタンは真剣さを増す（*The Cosmopolitan increases in seriousness*）」というタイトルを付している．なぜなら，エイプリル・フールというおふざけの日はもう終わったからである．コスモポリタンが床屋の面前で合意文書を作成し終えたのは18――年4月1日午後11:45であり，その後，紳士用キャビンに来た彼はバイブルを数分間調べた後で「30分足らず前に私は何と言われたと思いますか？」（what was told me not a half-hour since? —*CM*, xlv, 242）と老人に言う．このようにして日付がすでに4月2日になっていることをほのめかす作者は，もう冗談やおふざけで叙述してはいないことを，つまり，作者の本物の顔を見せ始め，本心を明かすことを読者に示唆している．そして作者の本心は不信にあることが登場人物の言葉と行為を通して描出される．

人間不信は，ランプの下でバイブルを読んでいた老人が，旅行者用防犯グッズを売りに来た少年から携帯用船室錠とマネーベルトを買う行為によって象徴的に示される．人間を信用できるのであれば，そうした防犯グッズは不要のはずだが，人間不信は厳然と当然のごとくに現実世界に存在する．そうした人間不信の現実が，コスモポリタンと防犯グッズを購入した老人の間で交わされる以下の会話中にはっきりと提示されている．

> 「で，今夜早速お金をベルトに入れるんですか？」
> 「それが一番いいんじゃないでしょうか？」とちょっと驚いた様子．「用心するに遅すぎることはないでしょう．‘スリにご用心’の張り紙が船内のいたるところにありますから」．
> 「そうですね，そんな張り紙をしたのはシラクの子か別の病的なすね者でしょう」.[37]

しかも，この会話は人間不信の主題から「宗教不信」の主題への橋渡しをしている．なぜなら，「私は人間を愛し，人間を信じる」（I love man. I have confidence in man. —*CM*, xlv, 242）と言うコスモポリタンの詐欺師にとって，“NO TRUST”のサインを掲げる床屋が言及した「シラクの子イエスの知恵」（‘Wisdom of Jesus, the Son of Sirach’ —*ibid*.）は，人間への「不信を教える」（teaches distrust —*CM*, xlv, 243）書で，「血を凍らせる知恵」（the wisdom that curdles the blood —*ibid*.）だからである．

上記の会話に先立ち，紳士用キャビン備え付けのバイブルで「シラ書〔集会の書〕」を読んだコスモポリタンは，その書中に「友達には気をつけよ」（Take heed of thy friends —*ibid*.; Ecclesiasticus 6:13）などの「不信の精神に満ちた」（charged with the spirit of distrust —*CM*, xlv, 244）文言を多々見出し，自らの博愛主義者としての人間への愛とシラクの子が教える人間に対する不信の精神との間で疑念と不安に襲われて苦しみ，老人に意見を問うたが，その時，老人は「あなたは私と似た考え方をしている．神により創られしものへの不信は，創造主の神に対する不信でもあるとお考えですな」（you are something of my way of thinking—you think that to distrust the creature, is a kind of distrusting of the Creator. —*ibid*.）と応じて，人間不信が「宗教不信」と表裏一体であることを示唆した．

本作品の帰結するところは「宗教不信」であり，これはコスモポリタンがランプの明かりを消す行為によって象徴的に表現される．最終章の第1パラグラフでメルヴィルは，紳士用キャビンの天井中央部に一つだけランプが灯されており，そのランプのシェードの透かし模様には「火炎が立ち昇る角つき祭壇の図像と光輪を頭上に頂いたローブ姿の人物像とが交互に」（the image of a horned altar, from which flames rose, alternate with the figure of a robed man, his head encircled by a halo —*CM*, xlv, 240）並んでいると叙述する．そして最終章の最終パラグラフでメルヴィルは，コスモポリタンがランプを消した瞬間を「次の瞬間，衰えていた光が消え，それとともに角つき祭壇の衰えた炎とローブ姿の人物の頭の消えかかっていた光輪も完全に消えた」（The next moment, the waning light expired, and with it the waning flames of the horned altar, and the waning halo round the robed man’s brow. —*CM*, xlv, 251）と描出する．物としては単なる透かし模様であり図柄にすぎない「角つき祭壇」と「ローブ姿の人物」の描出が繰り返され，強調されている．これは，すでに多くの研究者により指摘されているように，旧約聖書の出エジプト記でヤーウェがモーゼに作り方を指示した祭壇と新約聖書のイエスを想起させる図柄で，したがってランプはバイブルとキリスト教の象徴として使用されていると言えるであろう．

このランプが燃え続けていた間，「キャビン内の寝台には，心の中で祝福する人々もいれば，心の中で罵る人々もいた」（inwardly blessed by those in some berths, and inwardly execrated by those in others —*CM*, xlv, 241）という情況も象徴的で，キリスト教を信仰する者もいれば，嫌悪する者もいることを暗示していると思われる．さらに「外側は古びて，中は新しい」（old without, and new within —*CM*, xlv, 249）バイブルは，バイブルを読まない世間の人々の信仰心の欠如の象徴となっている．そして，ランプの明かりが衰えつつある状態は，キリスト教信

仰が希薄化している社会状況を暗示し，そのランプを消す行為は，バイブルとキリスト教とに対する疑念と不信から，それらの存在意義を否定する象徴的行為と解釈できよう．ランプの明かりの消滅に続く「闇」（darkness —*CM*, xlv, 251）のラストシーンは，愛（チャリティ）の光が消えて，不信の闇に包まれる作者メルヴィルの内面の描出と考えてよかろう．

4．おわりに——「最も難解な作品」（the hardest nut to crack）

この作品が発表された当時，*The Critic*（April 15, 1857）は「『信用詐欺師』は，彼の全著作中，最も難解な作品であろう．理解できたのかどうか，皮相の意味とは別の深い意味が隠されているのかどうかも，私たちにはよく分からない」[38] と評した．また *The Westminster and Foreign Quarterly Review*（July 1, 1857）は「人間性に対する見方は厳しく，暗い…息抜きできず，タイモンの精神が濃すぎる」[39] と述べた．

『信用詐欺師』は，他のメルヴィルの作品と比べて，非常に読みにくい．遺作となった中編小説『水兵ビリー・バッド』（*Billy Budd, Sailor,* 1891）もそうだが，回りくどい言い回しと語り口で，言葉数が非常に多い．わざと分かりにくいようにメルヴィルは書いたのではないかと筆者には思える．文体が読みにくいだけでなく，作者の意図と真意もとらえにくい．しかし，作品の最初の数章と最後の数章を理解すれば，作品のテーマと結論が，つまり，作者の言いたいことの核心部分が理解できる仕組みになっている．

ただ，疑問点が一つ残る．コスモポリタンは，どの一章を読み上げようとしたのか？彼は老人に向けてバイブルからの一章を読み上げようとしたが，ランプが暗くなり始め，老人も自分の個室に戻る支度をし始めたため，結局読み上げられることのなかった一章はどれなのか？「箴言」中のソロモンの知恵の一章か？アポクリファ中の一章か？作者は一体何のために，どういう意図で，このような答なき謎を残したのか？読者にその一章を探すべくバイブルを開かせるためか？あるいは，そんなことに疑問を抱いてバイブルを開く人間なんていないだろうという思いから，わざと答なき謎を残したのか？

この作品は一般の読者には決して好まれないであろう．だが，メルヴィルとその時代を知るためには是非とも読んで理解したい作品である．[40]

註

1）high over my ocean, sweet Shakespeare soars, like all the larks of the spring. —*Mardi*, cxix, 367.（『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and a Voyage Thither*［Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968］を使用し，引用には章と頁を付す．）

2）as if... this superb apartment was the moon-lit garden of Portia at Belmont; and the gentle lovers, Lorenzo and Jessica, lurked somewhere among the vines. —*RB*, xlvi, 228.（『レッドバーン』のテキストは Herman Melville, *Redburn: His First Voyage*［Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1969］を使用し，引用には，省略されたタイトル，章，頁を付す．）

3）the Captain made his ceremonious way to the cabin, disappearing behind the scenes, like the pasteboard ghost in Hamlet. —*WJ*, xxxix, 163.（『ホワイト・ジャケット』のテキストは Herman Melville, *White-Jacket; or The World in a Man-of-War*［Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970］を使用し，引用には，省略されたタイトル，章，頁を付す．）

4）St. Shakspeare［sic］... his sacred text —*WJ*, xli, 168.

5）“Will Captain Claret vouchsafe one day’s liberty, and so assure himself of eternal felicity, since, in our flowing cups, he will be ever after freshly remembered?” —*WJ*, xli, 214.

6）“‘Kind gentlemen,.. your pains are registered where every day I turn the leaf to read’-Macbeth” —*WJ*, xli, 215.

7）Shylock must have his pound of flesh. —*WJ*, lxxxviii, 371.

8）この場面の台詞の行数は版によって異なる．例えば，Cambridge University Press では 384，Oxford University Press では 370 だが，本稿では Arden 版に拠った．

9）Dolt & ass that I am I have lived more than 29 years, & until a few days ago, never made close acquaintance with the divine William. Ah, he’s full of sermons-on-the-mount, and gentle, aye, almost as Jesus... if another Messiah ever comes twill［sic］be in Shakesper’s［sic］person.—I am mad to think how minute a cause has prevented me hitherto from reading Shak speare［sic］. But until now, every copy that was come-atable［sic］to me, happened to be in a vile small print unendurable to my eyes which are tender as young sparrows. But chancing to fall in with this glorious edition, I now exult over it, page after page. — —Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville*（New Haven: Yale University Press, 1960）, p. 77.

10）the great Art of Telling the Truth —Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*（Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1987）, p. 244.

11）men not very much inferior to Shakespeare, are this day being born on the banks of the Ohio. —Herman Melville, *Moby-Dick*（New York: W. W. Norton &

Company, Inc., 1967), p. 543. メルヴィルのオリジナル原稿は「シェイクスピアたちが今日，オハイオ川の岸辺に誕生しつつある」．(Shakespeares are this day being born on the banks of the Ohio. —Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 245.)

12) If Shakespeare has not been equalled, give the world time, and he is sure to be surpassed, in one hemisphere or the other. —Herman Melville, *Moby-Dick* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1967), p. 544. メルヴィルのオリジナル原稿は「シェイクスピアに並ぶ者がまだ出ていないとしても，彼は確実に超えられるだろう．それも，今すでに誕生しているか，あるいはこれから生まれて来るアメリカ人によって確実に超えられるだろう」．(If Shakespeare has not been equalled, he is sure to be surpassed, and surpassed by an American born now or yet to be born. —Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 246.)

13) Through the mouths of the dark characters of Hamlet, Timon, Lear, and Iago, he [= Shakespeare] craftily says, or sometimes insinuates the things, which we feel to be so terrifically true, that it were all but madness for any good man, in his own proper character, to utter, or even hint of them. —Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, p. 244. [ ] 内の語句は筆者が補った．以下同様．

14) Life is a pic-nic *en costume*; one must take a part, assume a character, stand ready in a sensible way to play the fool. —*CM*, xxiv, 133.（『信用詐欺師』のテキストは Herman Melville, *The Confidence-Man: His Masquerade* [Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1984] を使用し，引用には，省略されたタイトル，章，頁を付す．）

15) "All the world's a stage,
And all the men and women merely players,
Who have their exits and their entrances,
And one man in his time plays many parts." —*CM*, xli, 224.

16)『信用詐欺師』は偏見と差別が当たり前のように色濃く存在していた19世紀中の作品であるため，今日的感覚では好ましくないとされる表現が複数，作品中に発生する．

17) Charity thinketh no evil... Charity suffereth long, and is kind... Charity endureth all things... Charity believeth all things... Charity never faileth. —*CM*, i, 4-5.

18) people would have a bout at a strange sort of pitch-penny game, the cripple's mouth being at once target and purse, and he hailing each expertly-caught copper with a cracked bravura from his tambourine. —*CM*, iii, 11.

19) "Oh yes, oh yes, dar is aboard here a werry nice, good ge'mman wid a weed, and a ge'mman in a gray coat and white tie, what knows all about me; and a ge'mman wid a big book, too; and a yarb-doctor; and a ge'mman in a yaller west; and a ge'mman wid a brass plate; and a ge'mman in a wiolet robe; and a ge'mman as is a sodjer." —*CM*, iii, 13.

20) shuffling a pace nigher, with one upstretched hand he received the alms, while, as unconsciously, his one advanced leather stump covered the card. —*CM*, iii, 17.

21) "Oh, whar, whar is dat good friend of dis darkie's, dat good man wid de weed ?" —*CM*, iii, 17.

22) "could you now... by way of experiment, simply have confidence in me?" —*CM*, v, 27.

23) "at the last landing I myself—just happening to catch sight of him on the gangway-plank—assisted the cripple ashore. No time to talk, only to help. He may not have told you, but he has a brother in that vicinity." —*CM*, vi, 29.

24) "You two green-horns! Money, you think, is the sole motive to pains and hazard, deception and deviltry, in this world. How much money did the devil make by gulling Eve?" —*CM*, vi, 32.

25) "mankind... upon the whole—making some reasonable allowances for human imperfection—present as pure a moral spectacle as the purest angel could wish." —*CM*, xxii, 119.

26) Was the man a trickster, it must be more for the love than the lucre. Two or three dirty dollars the motive to so many nice wiles? —*CM*, xxiii, 130.

27) the Mississippi..., which, uniting the streams of the most distant and opposite zones, pours them along, helter-skelter, in one cosmopolitan and confident tide —*CM*, ii, 9.

28)『信用詐欺師』中にはストーリーとは無関係の章が3つ（14，33，44章）あり，いずれも内容的に，フィクション作家としてのメルヴィルのエッセイのような体をなしている．14章は善良な田舎商人の人格描写の矛盾に関する弁明の章，33章は小説の非現実性に関する弁明の章，44章はフィクションにおけるキャラクターの創造について語る章となっている．

29) "Stranger! if you ever visit America, just call at our house, and you'll always find there a dinner and a bed. Don't fail." —*RB*, xliii, 212.

30) Maternal charity nursed you as a babe; paternal charity fed you as a child; friendly charity got you your profession. —Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 312.

31) To be the subject of alms-giving is trying, and to feel in duty bound to appear cheerfully grateful under the trial, must be still more so. —*CM*, iii, 11.

32)『モービィ・ディック――鯨』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale* [Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1988] を使用し，引用には，省略されたタイ

トル，章，頁を付す．

33）“one roams not over the gallant globe in vain. Bred by it, is a fraternal and fusing feeling... the principle of a true citizen of the world is... to return good for ill.” —*CM*, xxiv, 132-3.

34）“Take all Mardi for thy home. Nations are but names; and continents but shifting sands.” —*Mardi*, clxxxix, 638.

35）Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 232.

36）“misanthropy, springing from the same root with disbelief of religion, is twin with that. It springs from the same root, I say; for... what is an atheist, but one who does not, or will not, see in the universe a ruling principle of love; and what a misanthrope, but one who does not, or will not, see in man a ruling principle of kindness?” —*CM*, xxviii, 157.

37）“Pray, will you put your money in your belt to-night?” “It’s best, ain’t it?” with a slight start. “Never too late to be cautious. ‘Beware of pick-pockets’ is all over the boat.”
“Yes, and it must have been the Son of Sirach, or some other morbid cynic, who put them there.” —*CM*, xlv, 247.

38）*The Confidence Man* is that of all his works which readers will find the hardest nut to crack. We are not quite sure whether we have cracked it ourselves—whether there is not another meaning hidden in the depths of the subject other than that which lies near the surface. —Jay Leyda ed., *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969), pp. 572-3.

39）The view of human nature is severe and somber... It wants relief, and is written too much in the spirit of Timon. —Jay Leyda ed., *op. cit*., p. 581.

40）筆者が目を通した『信用詐欺師』批評のほとんどすべては，何らかの推察や推断の根拠を論考あるいは論証する分析的解釈にはなっていない．H. ブルース・フランクリンが唯一論証的な書き方をしており，キリスト教およびインドやインカ等の東西の神話と宗教に登場する神々を主人公の詐欺師と合体させて作品の解明を試みているが，しかし，この神話的側面からのアプローチには限界がある．なぜなら，例えば作品冒頭の詐欺師登場の場面で言及されるインカの神話的人物マンコ・カパク（Manco Capac）にしても，あくまで比喩であり，作品を解読するためのヒントにはなるが，詐欺師の実体そのものではないからである．フランクリンがその論考の最終段落で述べている結論，「この宇宙において人間の救い主——マンコ・カパク，ヴィシュヌ，キリスト，アポロ，仏教の仏陀——は詐欺師により体現されており，詐欺師は同時に人間の破壊者——サタン，シヴァ，ヒンドゥー教の仏陀——でもある．メルヴィルの神話はすべての神々を詐欺師に変換している」(In this universe man’s Savior—Manco Capac, Vishnu, Christ, Apollo, the Buddhists’ Buddha—is embodied by the Confidence Man, who is also man’s Destroyer—Satan, Siva, the Hindus’ Buddha. Melville’s mythology converts all gods into the Confidence Man. —H. Bruce Franklin, *The Wake of the Gods: Melville’s Mythology*［Stanford, CA: Stanford University Press, 1963］p. 187）という結論も比喩の域内に留まっており，実体の解明には至っていない．比喩の奥にある実体は，筆者が本論で述べたように，愛を提唱する詐欺師の前面の顔——「人間の救い主」のようなマスク——と，その奥にある人間憎悪と宗教不信の顔——「人間の破壊者」のような素顔——である．

フランクリンは『信用詐欺師』を「メルヴィルの最も完成度が高い作品…最も野心的な作品…最もこっけいな作品…最もぞっとする作品…最も分かりにくい作品」(Melville’s most nearly perfect work... most ambitious work... most comic work... most appalling work... most puzzling work —*ibid*., p. 153-4）と評している．実際，アメリカの著名な批評家や研究者たちの間にも，誤読もしくは記憶の混乱に起因すると考えられる間違った解釈が複数見受けられるほどに分かりにくい作品のようである．例えば，この作品には 2 人の聖職者，若い監督協会派牧師（a young Episcopal clergyman）とメソジスト派牧師（a Methodist minister）が登場するが，彼ら 2 人の行動を取り違えて解釈している事例や，キャビン備え付けのバイブルを老人所有のバイブルと勘違いしたり，旧約と新約の間に挟まれているアポクリファを指の間に挟んで説明する老人をコスモポリタンと誤解している事例などがある．

判断の根拠の論証が行われていないにしても，鋭い洞察に基づくと考えられる的確な評言も複数見受けられる．アーヴィンは『信用詐欺師』を「最も絶望的な書」(his most despairing book —Newton Arvin, *Herman Melville*［New York: The Viking Press, 1950］, p. 47）と呼び，「アメリカ人によって書かれた最も不信心な書，道徳的にも形而上学的にも，この上なく完全に虚無的な書の一つ」(one of the most *infidel* books ever written by an American; one of the most completely nihilistic, morally and metaphysically —*ibid*., pp. 250-1）と評している．彼はさらに，「キャビン内の消えゆくランプは，彼［メルヴィル］自身の衰えゆくパワーを意識した象徴だった」(the dying lamp in the cabin was an all but conscious symbol of his［=Melville’s］own dimming powers. —*ibid*., p. 232）と推量したが，そのランプが完全に消された後に残る闇を「死の闇」(the darkness of death —Merlin Bowen, *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*［Chicago: The University of Chicago Press, 1960］p. 117）と呼んだ批評家もいれば，あるいは「トリックスターがこのランプを吹き消す行為は，神が原初の息吹と光を吹き込む行為の裏返しである．私たちは天地創造以前の，太陽が隠れた闇の時代に戻る」(The Trickster blows this lamp out in a reversal of the Deity’s inspiring primal breath and light. We are back before Creation, in the darkness of a truly hidden sun. —Warwick

Wadlington, *The Confidence Game in American Literature* [Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975] p. 166）と解釈する研究者もいる．

また，ブラズウェルは，『信用詐欺師』は「メルヴィルの最もシニカルな人間観を表現している…詐欺師の描出でメルヴィルは，非常にシニカルな見方で宗教を提示している」（expresses Melville's most cynical views on man... In his portrayal of the confidence man Melville presents religion in a very cynical light. —William Braswell, *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation* [New York: Octagon Books, 1973], p. 115）ことを指摘し，メイソンは「この作品はこれまであまり読まれなかったし，たぶん今後もこの本を読む人は少ないだろう．しかし，この本はメルヴィルの一部として存在する…『モービィ・ディック』と同様に『信用詐欺師』は，メルヴィルの構造式に欠かせない一部である」（It has never had many readers, and probably never will have. Yet it exists as a part of Melville... *The Confidence-Man* is as organic a part of the Melville formula as *Moby Dick*. —Ronald Mason, *The Spirit Above the Dust* [Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972], p. 199）と評した．いずれも首肯できる評言である．

参考文献

Adler, Joyce Sparer. *War in Melville's Imagination*. New York and London: New York University Press, 1981.

Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.

Auden, W. H. *The Enchafèd Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.

Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1962.

Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.

Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.

Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.

Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.

Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.

Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.

Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.

Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1963.

Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.

林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂，1958．

Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967.

Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955.

Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.

Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.

Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.

Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.

Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.

Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.

Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 1, 1819-1851*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1996.

Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 2, 1851-1891*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 2002.

Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.

Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988.

Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.

酒本雅之『砂漠の海―メルヴィルを読む』東京：研究社，1985．

Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.

曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店，1972．

Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.

Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Prin-

ceton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N. C.: Duke University Press, 1949.

要　旨

メルヴィルの９作目で最後の長編『信用詐欺師』にはシェイクスピアの引喩が多発するが，人間を憎悪するタイモンの精神が，詐欺師の８枚の仮面の背後にあるものを解明する鍵である．作品全体を通して「愛」，「信」，「信用」，「不信」という言葉が頻出する．愛と信を詐欺師は対外的に唱道し，ミシシッピ川を下る蒸気船フィディーリ号に乗っている「愚か者ども」から愛と信を獲得しようとする．しかし，人間不信とキリスト教不信が彼の仮面劇の結末に顔を出す．